

学位（博士）論文要旨

理論看護学分野 基礎 看護学教育研究領域	学籍番号 0633002 氏名 藤田 三恵
論文題目	リハビリテーション回復期から維持期にある心疾患患者の 自己管理能力を支える看護の構造
<p style="text-align: center;">Keywords : 心臓リハビリテーション、回復期・維持期、 自己管理能力の支援、看護の専門性、理論の適用</p> <p>本研究は、筆者が心臓リハビリテーション室専従看護師として関わった自己の看護実践を分析し、心疾患患者の自己管理能力を支援する看護の過程的構造を明らかにし、心臓リハビリテーション回復期から維持期における看護の専門性を明らかにすることを目的とした。研究方法は、対象特性を描きながら関わった自己の看護実践を対象とし、経過一覽や患者と関わった場面のプロセスレコードをもとに研究資料を作成。研究資料を精読し、<u>患者の自己管理能力が変化したと思われる場面、看護者の働きかけが変化した場面</u>を選択し研究素材とする。研究素材を患者や看護者の認識の変化に焦点を当てて分析した結果、2か所に転換点を見出し、患者の自己管理能力にもよい変化を認めることができた。そこで転換点を区切りとし、時期毎に「看護者の認識の特徴」を抽出し、なぜ変化したのかという視点から、看護者の認識の働かせ方のポイントを取り出す。取り出したポイントから、患者の自己管理に向けた看護の専門性を吟味したところ、以下の8項目が取り出せた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 患者の訴えや発生している症状から、患者が消耗している状態であることを察知し、解決を要する対立が発生していると判断する。 2. 解決を要する対立の発生には生活に鍵があることを常に意識し、患者の症状や訴えから生活の具体に迫る。 3. 生活の具体の事実から、その意味を考え、解決を要する対立の構造を見抜く。 4. 対立の構造を見抜くことができれば、対立の調和に向けて方向性が見え、緊急性を踏まえ最もその場に適した具体的なケアを実施する。 5. 解決を要する対立の発生は、患者自身の身体内部にとどまらず、〈個と社会の対立〉、〈社会関係内部の対立〉との重層構造をもっているため、対立の連鎖などを見ぬき、患者と家族の消耗を取り除けるように援助する。 6. 回復過程を促進できるよう、細胞のつくりかえを念頭に、食生活の事実を把握し、必要時根拠と共に伝える。 7. 患者や家族の話に耳を傾け、相手の立場にわが身を重ね、自在に立場の変換をさせ相手の感情をわがことと捉える。 8. 対象特性をもとに、患者の持てる力を見極め信じる。 	

1,200字以内、A4版

指導教員氏名（自署）：

藤 井 埜 子

平成 21 年 2 月 9 日

宮崎県立看護大学大学院
 研究科長 薄井 坦子 様

学位論文 (修士・博士) 審査委員

主査 氏名 (自署) 薄井 坦子

副査 氏名 (自署) 山岸 仁美

副査 氏名 (自署) 赤星 誠

副査 氏名 (自署) 大名門 裕子

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文 (修士・博士) の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名 藤 田 三 恵		学籍番号 0 6 3 3 0 0 2	
看護学専攻 看護学分野 看護学教育研究領域		指導教授氏名 薄 井 坦 子	
成績 評価	学位 論文	最終 試験	合 格
論文 題目	リハビリテーション回復期から維持期にある心疾患患者の 自己管理能力を支える看護の構造		
審 査 要 旨	<p>予備審査では、心臓リハビリテーション室専従看護師として患者の自己管理能力を支援してきた 5 事例の分析によって、患者の認識が変化した過程が浮き彫りになっただけでなく、看護者自身の変化が顕著であることから、研究過程全体を見直してまとめるよう助言された。</p> <p>本審査では、看護者の認識の変化過程にそって選定した 5 事例 11 場面の看護過程をていねいに記述・分析し、その過程的構造を明らかにした上で、患者の自己管理能力を支援する 8 項目のポイントを抽出した。個別ケアを実践しにくい今日の医療状況のなかで、心疾患患者の自己管理能力を支援する看護の専門性を示し、看護者の意図的な看護展開の方向性を示唆することができた点が評価され、考察の力点を関係性において論述することによって、本研究の内容がより伝わるであろうと思われ、看護学上価値ある研究と認められた。</p>		